

情報モラル教育の研究動向と 教育方法学における指導方法

小 孫 康 平

〈要旨〉本研究では、2000年1月から2018年4月までに刊行された情報モラル教育に関する論文のタイトルを計量テキスト分析により研究動向を明らかにした。また、教育方法学において「情報モラル教育」をどのように指導するかを検討した。その結果、2000年代では主に、情報モラルの指導に関する実践研究が実施されたことが明らかになった。一方、2010年代では、道徳における情報モラルに関する研究に特徴がある。さらに、情報モラルの意識やインターネットの利用に関する研究が議論された。今後、教職課程を履修する大学生は、情報モラルの指導法を主に「教育方法学」の講義で学ぶことになる。したがって、ゲーム・リテラシー教育やSNSの利用方法などを含む教材を用いて効果的に情報モラルの講義を行うことが必要となる。

〈キーワード〉 情報モラル教育 教育方法学 研究動向 計量テキスト分析

1. はじめに

内閣府（2018）^[1]は、「平成29年度青少年のインターネット利用環境実態調査結果（速報）」を発表した。その結果によると、スマートフォンと携帯電話の所有・利用率は、小学生では55.5%、中学生では66.7%、高校生では97.1%であった。

このように、多くの児童生徒はスマートフォン等を利用しており、インターネット上の書き込みも活発に行われていると考えられる。近年は、インターネット上の書き込みが事件に発展するケースもあり、情報モラル教育の必要性を指摘する声が上がっている。

文部科学省（2018）^[2]の「平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（確定値）」によると、いじめの態様のうち「パソコンや携帯電話」等を使ったいじめの認知件数は以下の通りである。

小学校では2,679件（前年度2,075件）、中学校では5,723件（前年度4,644件）、高等学校では2,239件（前年度2,365件）、特別支援学校では138件（前年度103件）、総計で10,779件（前年度9,187件）であった。小学校、中学校、特別支援学校では認知件数は前年度より増加しており、「パソコンや携帯電話」等を使った「いじめ」が増える傾向が認められた。このような状況に対して教育委員会ではネットモラルに取り組んでいる事例が見られる。例えば、九州の教育委員会はネットによるモラルについての教育に力を入れており、教師を対象にネットトラブルの実態などを学ぶ研修会を年2回開いている。また、スマートフォンの使い方に関する通知や保護者向けのチラシも公立学校に配布し、注意喚起を行っている^[3]。

文部科学省（2017）^[4]は、教職課程の再課程認定に伴い情報モラルを含む教職課程コアカリキュラムを公表した。教職課程の科目である「教育の方法及び技術」（2019年度入学者から適用）では、情報機器及び教材の活用の「到達目標」の中で、「子供たちの情報活用能力（情報モラルを含む）を育成するための指導法を理解していること」と記述されている。今後、教職課程を履修する大学生は、情報モラルの指導法を主に「教育方法学」の講義で学ぶことにな

る。情報モラルは、情報活用能力の講義の中で説明する必要があるので、短時間で効果的に理解するための指導方法を検討する必要がある。

2. 情報モラル教育の変遷

臨時教育審議会第三次答申（1987年4月1日）^[5]においては、情報化への対応として次の3項目を提言した。

- (1) 情報モラルの確立
- (2) 情報化社会型システムの確立
- (3) 情報環境の整備

この第三次答申の中で初めて「情報モラル」という言葉が用いられた。

次の臨時教育審議会第四次答申（1987年8月7日）^[5]では、情報化への対応として次の4項目を提言した。

- (1) 情報モラルの確立
- (2) 情報化社会型システムの確立
- (3) 情報手段の活用
- (4) 情報環境の整備

中央教育審議会第一次答申（1996年7月19日）^[6]では、情報化の「影」の部分への対応の中で、「情報モラル」は次のように位置づけられた。

一人一人が情報の発信者となる高度情報通信社会においては、プライバシーの保護や著作権に対する正しい認識、「ハッカー」等は許されないといったコンピュータセキュリティの必要性に対する理解等の「情報モラル」を、各人が身に付けることが必要であり、子供たちの発達段階に応じて、適切な指導を進める必要がある。そして、こうした点について子供たちに正しく理解させるための指導方法や指導内容等について研究を促進する必要がある。

また、中央教育審議会第二次答申（1997年6月1日）^[7]では、「21世紀を展望した我が国の教育の在り方」の中で、「情報モラル」を次のように提言している。

高度情報通信社会で生きていくために必要となる資質や能力を子どもたちに養っていくことは、今日の教育において極めて重要な課題となっている。情報化に対応する教育を重視する観点を軸に据えて、6年間にわたり、十分な時間をかけてインターネットなどの情報ネットワークを活用したり、情報リテラシーを体系的に育成したり、「情報モラル」をしっかりと身に付けさせるような教育活動を積極的に取り入れていくことが期待される。

さらに、「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議最終報告」（1998年）^[8]では、今後の初等中等教育段階で育成すべき「情報活用能力」を以下のように整理し、情報教育の目標として位置づけることを提案した。

(1) 情報活用の実践力

課題や目的に応じて情報手段を適切に活用することを含めて、必要な情報を主体的に収集・判断・表現・処理・創造し、受け手の状況などを踏まえて発信・伝達できる能力。

(2) 情報の科学的な理解

情報活用の基礎となる情報手段の特性の理解と、情報を適切に扱ったり、自らの情報活用を評価・改善するための基礎的な理論や方法の理解。

(3) 情報社会に参画する態度

社会生活の中で情報や情報技術が果たしている役割や及ぼしている影響を理解し、情報モラルの必要性や情報に対する責任について考え、望ましい情報社会の創造に参画しようとする態度。

この最終報告では、情報モラルは「情報社会に参画する態度」の重要項目として位置づけられたのである。

文部科学省（2007）^[9]は、情報モラル教育を体系的に推進するために「情報モラル指導モデルカリキュラム」を作成した。このモデルカリキュラムでは、

情報モラルの指導内容を5つの分類に整理し、それぞれの分類ごとに、児童生徒の発達段階に応じて大目標・中目標レベルの指導目標を設定した。

次に、「教育の情報化に関する手引」（2010年）^[10]の「第5章 学校における情報モラル教育と家庭・地域との連携」では、「情報モラルとは、情報社会で適正に活動するための基となる考え方や態度のことである」と指摘している。また、その範囲は、「他者への影響を考え、人権、知的財産権など自他の権利を尊重し情報社会での行動に責任をもつこと、危険回避など情報を正しく安全に利用できること、コンピュータなどの情報機器の使用による健康とのかかわりを理解することなど多岐にわたっている」と報告している。

現行の小学校学習指導要領（2008年3月告示）^[11]では、情報モラルは以下のように記述されている。

各教科等の指導に当たっては、児童がコンピュータや情報通信ネットワークなどの情報手段に慣れ親しみ、コンピュータで文字を入力するなどの基本的な操作や情報モラルを身に付け、適切に活用できるようにするための学習活動を充実するとともに、これらの情報手段に加え視聴覚教材や教育機器などの教材・教具の適切な活用を図ること。

一方、2020年度から実施の新小学校学習指導要領^[12]では、情報モラルは次のように位置づけされている。

各学校においては、児童の発達の段階を考慮し、言語能力、情報活用能力（情報モラルを含む）、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする。

このように、新小学校学習指導要領では、「情報活用能力」に情報モラルが含まれることを示し、児童の発達の段階を考慮して、教科等横断的に育成することとしている^[13]。

3. 情報モラル教育に関する研究動向

情報モラル教育の重要性を大学生に指導する際は、どのような研究が行われているかを説明する必要がある。論文のタイトルは、論文の内容を最も端的に反映しているので、論文のタイトルを分析することで研究動向を把握することが可能となる。

例えば、趙ら（2013）^[14] は、「介護福祉学」の論文タイトルを用いてテキスト分析を実施し、研究傾向や特徴を明らかにした。また、安・中島（2014）^[15] は、2001年度から2010年度まで発行された介護関連学会誌の文献を対象に、介護と関連した研究傾向を分析した。その結果、「認知症高齢者とその家族介護者に関連する研究、介護福祉士の養成教育のカリキュラムや実習、利用者と介護者の意識や従事者の職務満足度とストレスに関する研究など社会や制度政策の変化に伴ってそれと関連する研究が最も行われている傾向がある」と指摘している。

心理学の分野では、佐々木（2017）^[16] はテキストマイニングの手法を用いて心理学会機関誌7誌の論文タイトルの傾向について検討した。その結果、各学会誌の特徴、学会誌間の関係、タイトルの変遷が明らかになったと報告している。

情報モラル教育の分野では、石原（2011）^[17] は情報モラル教材の内容に関して調査を行った。その結果、「暗転型」（不注意や判断ミスにより深刻な状況を招くというあらすじ）の教材が81%占めたと報告している。また、宮川・福本・森山（2010）^[18] は、2007年までに発刊された「情報モラル」、「情報倫理」に関する先行研究について、児童・生徒の実態把握、カリキュラム、教材開発、授業実践及び評価のカテゴリを設定して整理している。

酒井（2016）^[19] は、2010年以降に刊行された義務教育段階における情報モラル教育の研究事例について検討した。その結果、様々な授業実践が行われている一方で、カリキュラム作成や複数の学校種を対象とした研究事例は少ないことを明らかにした。しかし、2010年以前の研究動向については検討されていない。

そこで、本研究では2000年1月から2018年4月までに刊行された情報モラル教育に関する論文を計量テキスト分析により、研究動向を明らかにする。また、教育方法学において「情報モラル教育」をどのように指導するかを検討することを目的とする。

4. 方法

4.1 調査方法

日本の学協会刊行物・大学研究紀要などの学術情報が検索できるデータベース・サービスである「CiNii-Articles」を用いた。「情報モラル」というキーワードでタイトルを検索し、抽出を行った。なお、タイトルに「情報モラル」という語が入っていない論文は除外した。

我が国では、2010年度を境にスマートフォンが普及し、SNSやスマートフォン用ゲームが利用されてきた^[19]。また、LINE等によるコミュニケーションのトラブルも多発してきた。したがって、2000年代と2010年代の研究を比較することで研究テーマの特徴を明らかにすることが可能であると考ええる。

4.2 分析方法

計量テキスト分析とは、文章からなるデータを単語や文節で区切り、単語の出現の頻度などを解析することで有用な情報を取り出す分析方法である^[20]。

今回は、テキスト型データを統計的に分析するためのソフトウェアである「KH Coder」^[21]を用いて、頻度分析、共起ネットワーク分析を行う。

頻度分析とは、対象文献における単語の出現頻度を検討するものである。「出現頻度が高い単語ほど重要度が高い」というものである^[22]。また、共起ネットワーク分析とは、単語と単語の間の関連性を検討する分析である。つまり、2つの単語について同じ文章中に同時に出現（共起）すると関連が強いと見なす^[22]。

本研究では、共起の程度が強いコードを線で結ぶことで関連性を把握できる「サブグラフ検出」で表現した。サブグラフ検出は、共起関係が強いほど太い線で示し、大きい円ほど出現数が多いことを示すなどの特徴がある^[21]。サブ

グラフ検出を行った場合、同じサブグラフに含まれる単語は実線で結ばれるのに対して、互いに異なるサブグラフに含まれる単語は破線で結ばれる^[22]。さらに、Jaccard 係数（2つの集合間の類似性を表す指標で関連が強いほど1に近づく）を用いることで、1つの文章に含まれる語が少ないデータにおいても、語と語の関連を比較的正確に示すことができる^[23]。

5. 結果

5.1 2000年代における情報モラルの論文タイトル

CiNii-Articles の検索の結果、2000年代では303件であった。2010年代では378件であり、総計681件であった。

表1は、2000年代の情報モラルの論文タイトルに関して、出現回数の多い単語から順に出現回数15までの単語をリストアップしたものである。

表1 2000年代の情報モラルの論文タイトルに関する頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
情報モラル	171	知識	27
情報モラル教育	117	育成	26
情報	84	授業	25
指導	70	小学校	24
実践	62	社会	23
教育	55	子ども	22
学習	51	判断	19
学校	43	課題	18
研究	35	意識	16
開発	31	ネット	15
教材	30	技術	15
活用	28	検討	15

「情報モラル」が171回、次いで「情報モラル教育」が117回、「情報」が84回、「指導」が70回、「実践」が62回となっている。

図1は、2000年代の情報モラルの論文タイトルに関する共起ネットワーク分析の結果を示したものである。KH Coderの設定は、次の通りである。集計単位は段落、最小出現数は13、Jaccard係数は0.10以上、共起関係の検出方法はサブグラフ（媒介）検出を用いた。なお、数字は、Jaccard係数である。実線で結ばれた語のグループは6つであった。

①「情報モラル教育」、「実践」、「研究」、「授業」、「育成」、「対象」という6語のネットワークで構成されている。特に「授業」と「実践」ではJaccard係数は0.22であった。「情報モラル教育の授業実践」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「情報モラル教育の授業実践」、「情報モラル教育の授業実践のための事前調査」などがあつた。

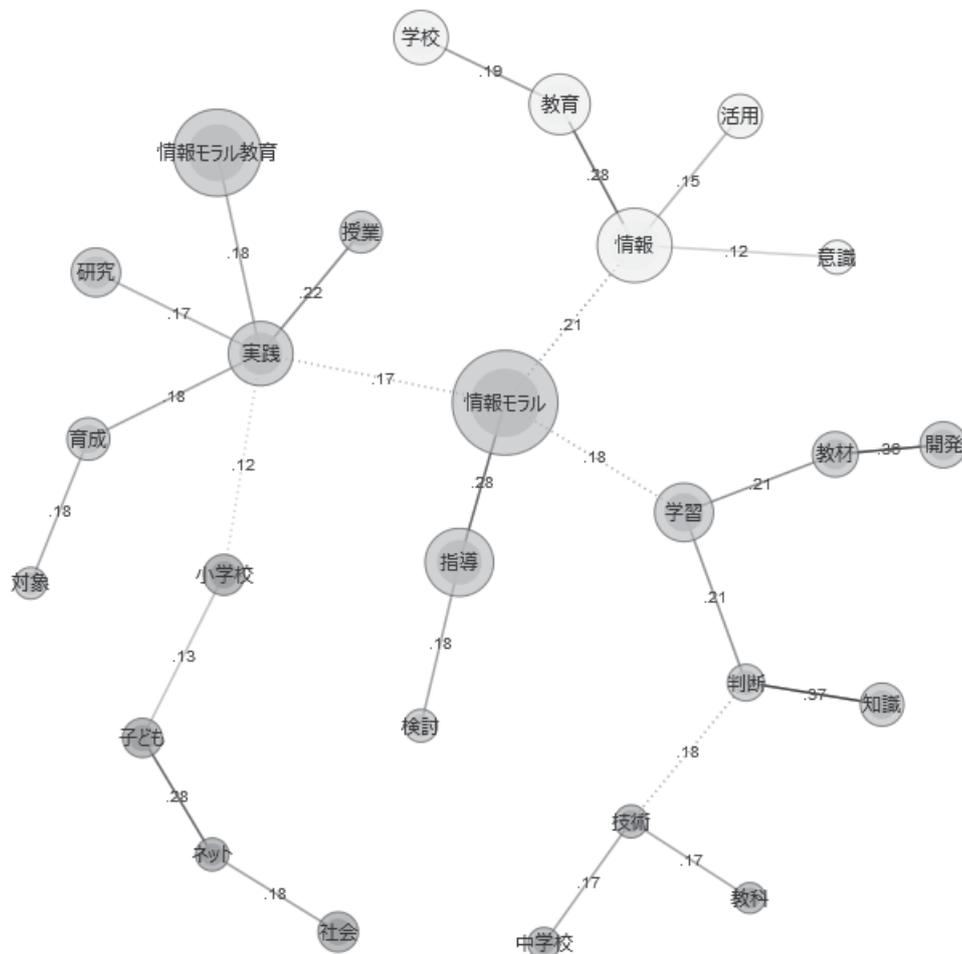


図1 2000年代の情報モラルの論文タイトルに関する共起ネットワーク分析

②「情報」、「教育」、「学校」、「活用」、「意識」という5語のネットワークで構成されている。特に「情報」と「教育」ではJaccard係数は0.28であった。

「情報教育」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「情報モラルを中心とした情報教育」などがあった。

③「学習」、「教材」、「開発」、「判断」、「知識」という5語のネットワークで構成されている。特に「教材」と「開発」ではJaccard係数は0.38であった。

また、「判断」と「知識」ではJaccard係数は0.37であった。「学習教材開発」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「情報モラルの4つの判断観点を用いた体験学習教材の開発と実践」などがあった。

④「小学校」、「子ども」、「ネット」、「社会」という4語のネットワークで構成されている。特に「子ども」と「ネット」ではJaccard係数は0.28であった。

「ネット社会」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「ネット社会の光と影をくぐり抜けるには、子どもたちをどう指導すればいいのか」、「ネット社会で生きる力をはぐくむ具体的な方策」などがあった。

⑤「情報モラル」、「指導」、「検討」という3語のネットワークで構成されている。特に「情報モラル」と「指導」ではJaccard係数は0.28であった。「情報モラル指導」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「計画的に取り組む情報モラル指導の在り方の検討を通して」などがあった。

⑥「中学校」、「技術」、「教科」という3語のネットワークで構成されている。「中学校技術科」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「中学校技術科教育における情報モラル」などがあった。

5.2 2010年代における情報モラルの論文タイトル

表2は、2010年代の情報モラルの論文タイトルに関して、出現回数の多い単語から順に出現回数20までの単語をリストアップしたものである。

表2 2010年代の情報モラルの論文タイトルに関する頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
情報モラル	200	研究	31
情報モラル教育	164	活用	29
指導	82	検討	29
教育	73	道徳	29
情報	72	学校	27
実践	52	社会	26
学習	45	利用	26
授業	43	調査	25
教材	41	問題	24
開発	36	教員	23
意識	32	実態	21
ネット	31	生徒	20

「情報モラル」が200回、次いで「情報モラル教育」が164回、「指導」が82回、「教育」が73回、「情報」が72回、「実践」が52回、「学習」が45回、「授業」が43回となっている。

図2は、2010年代の情報モラルの論文タイトルに関する共起ネットワーク分析の結果を示したものである。KH Coderの設定は、次の通りである。集計単位は段落、最小出現数は13、Jaccard係数は0.10以上、共起関係の検出方法はサブグラフ（媒介）検出を用いた。なお、数字は、Jaccard係数である。実線で結ばれた語のグループは7つであった。

情報モラル教育の研究動向と教育方法学における指導方法（小孫）

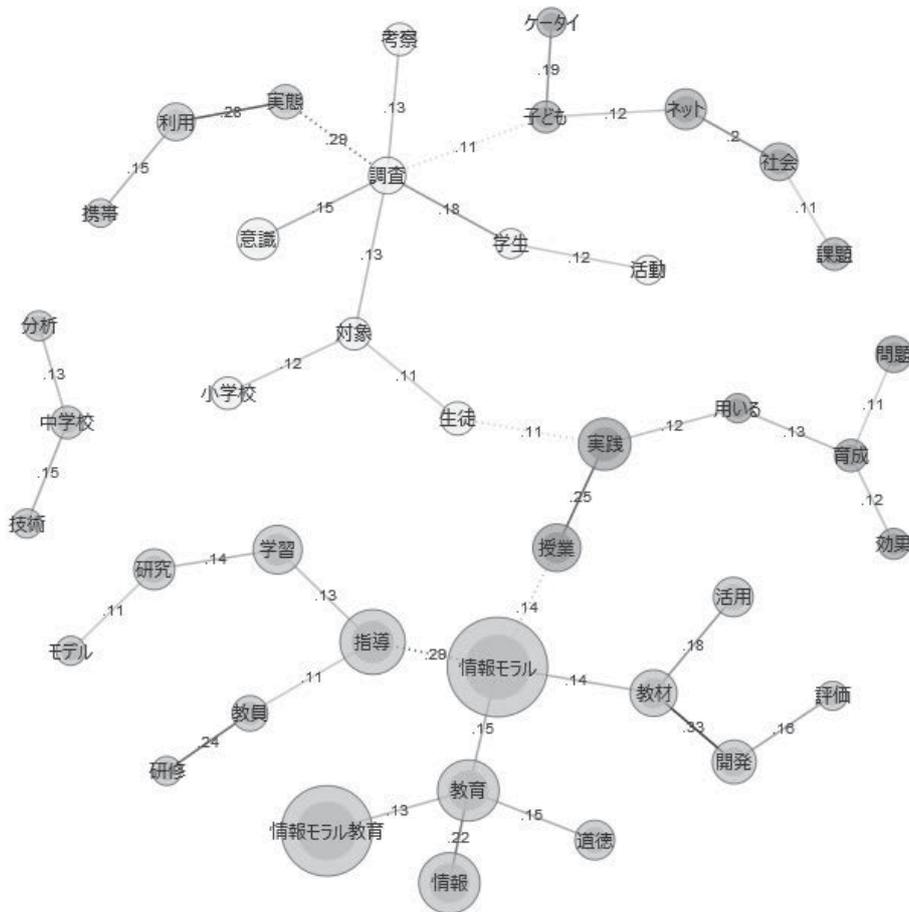


図2 2010年代の情報モラルの論文タイトルに関する共起ネットワーク分析

① 「情報モラル教育」、「情報モラル」、「道德」、「情報」、「教育」、「教材」、「開発」、「活用」、「評価」という9語のネットワークで構成されている。特に「教材」と「開発」ではJaccard係数は0.33で関連が強い。また、「情報」と「教育」ではJaccard係数は0.22であった。「情報モラルの教材開発」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「わたしたちの道德における情報モラルに関する教材の課題」、「道德教育における情報モラルの指導」などがあつた。

② 「意識」、「調査」、「対象」、「小学校」、「生徒」、「学生」、「活動」、「考察」という8語のネットワークで構成されている。「意識調査」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「地域差にみられる学生の情報モラルに関する意識調査の比較」などがあつた。

③ 「学習」、「指導」、「教員」、「研修」、「モデル」、「研究」という6語のネッ

トワークで構成されている。「教員研修」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「児童・生徒の情報モラルを育てるための教員研修」などがあった。

④「授業」、「実践」、「効果」、「問題」、「育成」、「用いる」という6語のネットワークで構成されている。特に「授業」と「実践」ではJaccard係数は0.25であった。「授業実践」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「中学校における情報モラル教育の授業実践」などがあった。

⑤「ネット」、「社会」、「課題」、「ケータイ」、「子ども」という5語のネットワークで構成されている。特に「ネット」と「社会」ではJaccard係数は0.20であった。「ネット社会」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「ネット社会における児童生徒の情報モラル」などがあった。

⑥「携帯」、「利用」、「実態」という3語のネットワークで構成されている。特に「利用」と「実態」ではJaccard係数は0.28であった。「携帯の利用実態」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「携帯電話の利用実態と情報モラル教育の構想」などがあった。

⑦「中学校」、「技術」、「分析」という3語のネットワークで構成されている。「中学校技術科」と解釈できる。具体的な論文タイトルとしては、「中学校技術科の内容を意識した技術理解に基づく情報モラル教育方策」などがあった。

5.3 年代別における情報モラルの論文タイトルの特徴

年代別の特徴の違いをより明確にするために年代別の外部変数を用いて共起ネットワーク分析を実施した。図3は、情報モラルの論文タイトルに関して年代別の共起ネットワーク分析の結果を示したものである。

KH Coderの設定は、次の通りである。集計単位は段落、最小出現数は13、Jaccard係数は0.15以上、外部変数として年代別を用いた。

年代（2000年代、2010年代）を示す矩形の外側に並ぶ語は顕著な差が見られた語群である。「2000年代」では、「指導」、「情報」、「実践」、「学習」、「研究」に関する内容の研究が特徴であった。

一方、「2010年代」では、「情報モラル教育」、「教育」、「授業」、「教材」、「道徳」、「ネット」、「意識」、「調査」に関する内容の研究が特徴であった。

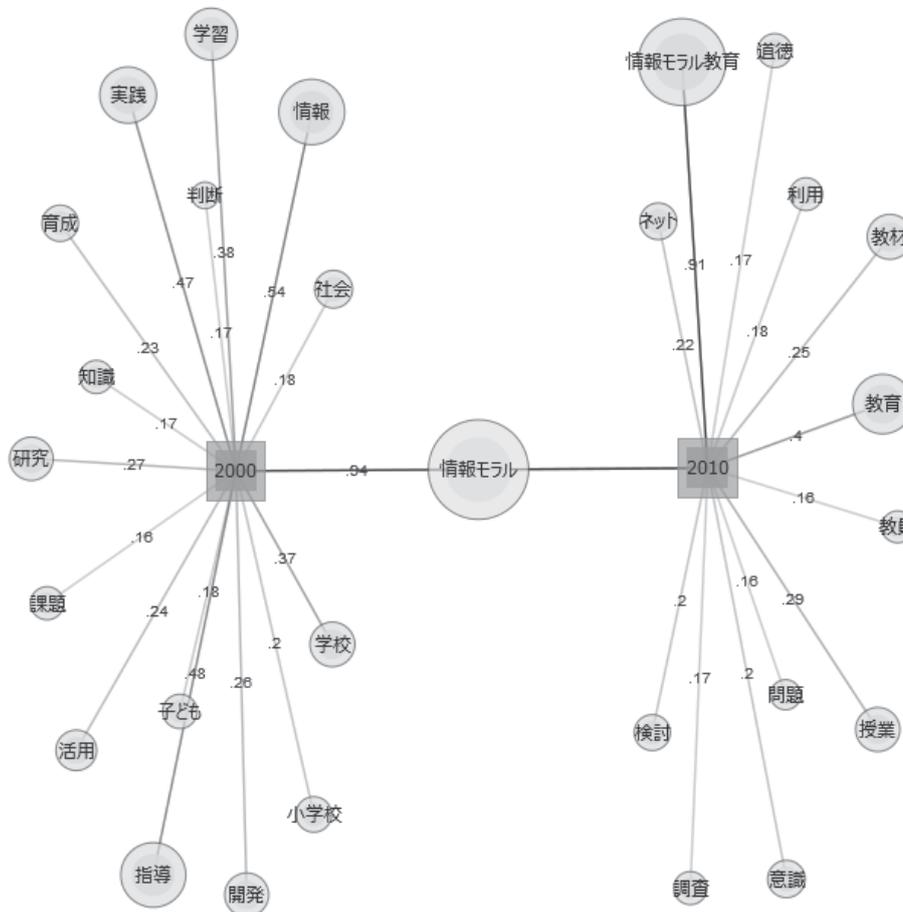


図3 年代別における情報モラルの論文タイトルの特徴

6. 考察

2000年代の情報モラルでは、「情報モラル教育の授業実践」、「情報教育」、「学習教材開発」、「ネット社会」、「情報モラル指導」、「中学校技術科」に関する研究が実施されている傾向があった（図1）。

一方、2010年代の情報モラルでは、「情報モラルの教材開発」、「意識調査」、「教員研修」、「授業実践」、「ネット社会」、「携帯の利用実態」、「中学校技術科」に関する研究が行われている傾向が明らかになった（図2）。

外部変数として年代別を用いた共起ネットワーク分析の結果、2000年代では、「指導」、「情報」、「実践」、「学習」、「研究」に関する内容の研究が特徴であった。一方、2010年代では、「情報モラル教育」、「教育」、「授業」、「教材」、

「道徳」、「ネット」、「意識」、「調査」に関する内容の研究が特徴であった（図3）。つまり、2000年代では主に、情報モラルの指導に関する実践研究に特徴があることが明らかになった。2010年代では、道徳における情報モラルに関する研究に特徴があることが認められた。具体的な論文タイトルとしては、「小中学校の道徳の教科書を用いた情報モラル教育の分析」、「道徳教育と情報モラル教育」、「道徳教育における情報モラルの教材と指導法の課題」などがあった。また、「道徳」に関する記述の出現回数は29回（表2）であった。一方、2000年代では「道徳」に関する記述の出現回数は10回であった。

2011年から全面実施された現行の小学校・中学校の新学習指導要領では各教科等に情報モラルの指導内容が記述されるようになった^[24]。これによって、すべての学校で情報モラルの指導が実施されることになった^[17]。特に、道徳で情報モラルが取り入れられたことにより、「道徳教育における情報モラル教材」などのタイトルで研究が進められたと考えられる。

また、2010年代では情報モラルの意識やインターネットの利用に関する研究に特徴がある。具体的な論文タイトルとしては、「中学生のメタ認知と情報モラルに対する意識の関係についての研究」、「インターネット利用に関する看護学生の情報モラルの実態」などがあった。スマートフォンは2010年度を境に普及し、SNSが利用されてきた^[19]。したがって、インターネットの利用に関する研究が行われたと考えられる。

次に、教育方法学において「情報モラル教育」をどのように指導するかを検討する。白山（2018）^[25]によると、教職課程を履修している4年生40人の内、大学の授業で情報モラル教育を扱って欲しいと回答した学生は77.5%であった。また、学校の指導の在り方については、ネットトラブル事例・犯罪例、インターネットやメール、SNSなどの利用の仕方などを指導する必要があると回答した者が多いと指摘している。

佐藤ら（2018）^[26]は、教員養成大学の学部1・2年生を対象に、情報モラル教育の基礎知識を学び、現職教員による模範授業映像を視聴した上で、情報モラル教育の授業設計を学習させるための講義を実施した。次に、授業中でインターネット活用中に不審なサイトを見てしまった場合の対応に関する教材を視

聴させ、視聴した教材を活用した指導案を作成するという演習を行った。また、教職課程における情報モラル指導法研究会と広島県教科用図書販売（広教）は、教職課程向けの情報モラルの指導方法に関する講義パッケージを開発した^[27]。この講義パッケージ（90分）は、青少年のインターネット、利用状況、携帯ゲーム機から事件へ、家庭でのルールなどの情報モラル指導を学習する内容となっている。また、小学校での情報モラルに関する模範授業の動画の視聴や情報モラルに関する授業の指導案を作成するという内容である。

小孫（2017）^[28]は、教職志望大学生を対象に、ビデオゲームの特性を知り、上手に付き合う方法を指導していくゲーム・リテラシー教育の教材内容に関する意識を計量テキスト分析から明らかにした。その結果、「ゲーム依存」、「ゲームの良い面・悪い面」などを指導する必要があると考えていることが明らかになった。ゲーム依存に関しては、ゲーム・リテラシーを身に着けることで防げる可能性があるとは指摘している。また、小孫（2018）^[29]は情報モラルの講義の中に、「児童生徒のゲーム機の利用方法の指導」も含める必要があると述べている。

今後、情報モラルの指導法は大学の教職課程において、主に「教育方法学」の講義で学ぶことになる。したがって、ゲームと上手に付き合う方法を指導していくゲーム・リテラシー教育やSNSの利用の仕方などを含む教材を用いて効果的に情報モラルの講義を行うことが重要となる。また、情報モラル教育の指導案を作成後、発表するというアクティブ・ラーニングの視点に立った授業を実施する必要がある。

7. 文献

[1] 内閣府,「平成29年度青少年のインターネット利用環境実態調査調査結果（速報）」, p.14, 2018.

<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/chousa/h29/net-jittai/pdf/sokuhou.pdf>（2018.8.2取得）

[2] 文部科学省,「平成28年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査（確定値）について」, p.48, 2018.

http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/30/02/__icsFiles/afieldfile/2018/02/23/1401595_002_1.pd（2018.8.2取得）

- [3] 西日本新聞,「専門家 ネットモラル教育必要」, 2018/06/26付 西日本新聞朝刊, 2016.

<https://www.nishinippon.co.jp/nnp/national/article/427533/>(2018.8.2取得)

- [4] 文部科学省,「教職課程コアカリキュラム」, p.22, 2017.

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2017/11/27/1398442_1_3.pdf（2018.8.2取得）

- [5] 文部科学省,「教育課程部会 家庭、技術・家庭、情報専門部会（第1回） 配付資料7 情報科教育の現状について」, 2005.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/024/siryo/attach/1402273.htm（2018.8.2取得）

- [6] 中央教育審議会,「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について 第一次答申 第3章 情報化と教育」, 1996.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm
（2018.8.2取得）

- [7] 中央教育審議会,「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について 第二次答申 第3章 中高一貫教育」, 1997.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/024/siryo/attach/1402273.htm（2018.8.2取得）

- [8] 文部科学省,「情報化の進展に対応した初等中等教育における情報教育の推進等に関する調査研究協力者会議最終報告 第I章 情報化に対応した教育について」, 1998.

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/002/toushin/980801.htm（2018.8.2取得）

- [9] 文部科学省,「情報モラル指導モデルカリキュラム」, 2007.

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2010/09/07/1296869.pdf（2018.8.2取得）

- [10] 文部科学省,「教育の情報化に関する手引」, p.117, 2010.

情報モラル教育の研究動向と教育方法学における指導方法（小孫）

http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2010/12/13/1259416_10.pdf（2018.8.2取得）

- [11] 文部科学省,『小学校学習指導要領（平成20年告示）』, p.16, 東京書籍, 2016.
- [12] 文部科学省,『小学校学習指導要領（平成29年告示）』, p.19, 東洋館出版社, 2018.
- [13] 文部科学省,「低年齢層の子供やその保護者に向けたインターネットの適切な利用に関する教育及び啓発活動の推進について」, p.1, 2017.
<http://www8.cao.go.jp/youth/youth-harm/kentokai/36/pdf/s3.pdf>
（2018.8.2取得）
- [14] 趙敏廷, 谷口敏代, 原野かおり, 松田実樹, 谷川和昭,「介護福祉学誌にみる介護福祉学の研究傾向－論文タイトルを用いたテキストマイニングから－」『介護福祉学』, Vol.20, No.2, pp.152-158, 2013.
- [15] 安瓊伊, 中島健一,「介護保険制度施行後10年間の介護の研究傾向－介護関連学会誌の文献のテキストマイニング分析を通して－」『日本社会事業大学研究紀要』, Vol.60, pp.139-155, 2014.
- [16] 佐々木宏之,「国内心理学会機関誌7誌の論文タイトル傾向分析－KH Coderを用いたテキストマイニングから－」『新潟中央短期大学紀要 暁星論叢』, 第67号, pp.11-41, 2017.
- [17] 石原一彦,「情報モラル教育の変遷と情報モラル教材」『岐阜聖徳学園大学紀要教育学部編』, 第50集, pp.101-116, 2011.
- [18] 宮川洋一, 福本徹, 森山潤,「義務教育段階における情報モラル教育に関する研究の動向と展望－CiNii 論文情報ナビゲータを活用した学術研究の動向把握を通して－」『岩手大学教育学部研究年報』, Vol.69, pp.89-101, 2010.
- [19] 酒井郷平,「小中学生を対象とした情報モラル教育に関する実践的研究動向の考察－2010年以降における研究事例の分類を通して－」『授業実践開発研究』, Vol.9, pp.81-88, 2016.
- [20] 越中康治, 高田淑, 木下英俊, 安藤明伸, 高橋潔, 田幡憲一, 岡正明, 石澤

- 公明,「テキストマイニングによる授業評価アンケートの分析—共起ネットワークによる自由記述の可視化の試み—」『宮城教育大学情報処理センター研究紀要』, 第22号, pp.67-74, 2015.
- [21] 樋口耕一,『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』, ナカニシヤ出版, 2014.
- [22] 下平裕之, 福田進治,「古典派経済学の普及過程に関するテキストマイニング分析—リカード、ミル、マーティノーを中心に—」『弘前大学人文学部人文社会論叢. 社会科学篇』, 31号, pp.51-66, 2014.
- [23] 嘉瀬貴祥, 坂内くらら, 大石和男,「日本人成人のライフスキルを構成する行動および思考：計量テキスト分析による探索的検討」『社会心理学研究』, Vol.32, No.1, pp.60-67, 2016.
- [24] 文部科学省,「現行学習指導要領の基本的な考え方」, 2011.
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/idea/index.htm (2018.8.2 取得)
- [25] 白山雅彦,「教職課程における情報モラル教育の扱いについての考察—学生への意識調査をもとに生徒指導も考慮した在り方について—」『秋田県立大学総合科学研究彙報』, 第19号, pp.73-85, 2018.
- [26] 佐藤和紀, 高橋純, 安里基子, 齋藤玲, 吉野真理子, 堀田龍也,「教員養成大学における情報モラル教育の講義の実践と評価—ワークシートと学年の違いによる授業設計への自信の変化に着目して—」『日本教育工学会論文誌』, Vol.41 (Suppl.), pp.41-44, 2018.
- [27] 広島県教科用図書販売,「教員を目指す学生のための情報モラルの指導方法」, 2018.
<http://www.hirokyou.co.jp/netmoral/yousei/> (2018.8.2 取得)
- [28] 小孫康平,「ゲームリテラシー教育の教材に関する教職志望大学生の意識の計量テキスト分析」『デジタルゲーム学研究』, Vol.10, No.1, pp.23-29, 2017.
- [29] 小孫康平,『デジタルメディア時代における教育方法と遊び—遊びとしてのビデオゲームに着目して—』, p.140, 風間書房, 2018.

Research tendencies in information ethics education and teaching methods
from the perspective of studies on educational methods

Yasuhira KOMAGO

Abstract

Research tendencies in information ethics education were investigated through quantitative text analysis of article titles published from January 2000 to April 2018. Moreover, methods of teaching information ethics were discussed from the perspective of studies on educational methods. The results indicated that practical research on information ethics teaching methods were mainly conducted in the 2000s. In the 2010s, on the other hand, information ethics was focused from the perspective of morality. Furthermore, the consciousness about the information ethics and use of the Internet were often discussed. In the future, university students in teacher training courses will learn methods of teaching information ethics mainly through lectures on educational methods. Therefore, it would be necessary to give effective lectures on information ethics by using teaching materials for game literacy education, and methods of using SNS.

Keywords: information ethics education, educational method, research tendency, quantitative content analysis,